

地域振興と人材育成

Marketing on Local Revitalization and Human Resource Development

清水 聡子
SHIMIZU Satoko

< 目 次 >

はじめに

1. 野沢温泉村の概要
2. 日本および長野県のスキー発祥
3. 野沢温泉スキー場の生成
4. 野沢温泉スキー場発展の原動力
5. 野沢温泉学園の誕生

むすびにかえて

はじめに

人口減少は日本全体に大きな影響を及ぼしている。本稿では人口減少に向き合い、地域振興に結びつけるために今、何をすべきかについて野沢温泉¹⁾に焦点をあて考察する。

地域はそこで暮らしている人々の生活の基盤である。生産活動を行い生活の糧を得る場であると同時に、衣食住、教育、医療など生きていくために必要なものを手にする場でもある。さらには、人々が集い、対話し、交流し、精神的・文化的活動を行う基盤でもある²⁾。

しかし、活力が落ち、衰退する地域が出現してきている。2006年6月、北海道夕張市の財政破綻が報じられた。多くの自治体が財政難にあることは以前から叫ばれてきたことだったが、同市の破綻は、まさに「役所も破産する時代」の到来を告げる出来事として、広く一般にも衝撃的に伝えられた。ニュースでは、テーマパークをはじめ「地域振興」の名のもとに作られてきたさまざまな施設が、財政破綻の象徴として取り上げられた³⁾。

また2011年3月11日の東日本大震災は、地域を根こそぎ破壊し、社会システムの機能が停止した。いまだ、人々の生活基盤である地域の復興は道なかばである。さまざまな地域課題を抱え、解決できずに困惑する地域は被災地だけではない。日本中で難問山積の地域が増加している。

この厳しい状況を把握し、日本の多くの地域が抱えるさまざまな地域課題を解決する1つの手法としてマーケティングを積極的に活用すべきではないかというのが本稿の問題提起である。

狭義のマーケティングは「企業の対市場活動」と捉えられてきたが、マーケティングは企業だけを対象としているのではなく、地域も行政も教育も医療もマーケティング的視点が求められるようになり、その範囲は拡大している⁴⁾。地域は地域課題を主体的に解決する能力が問われており、地域活性化や地域振興、人材育成においてマーケティング的視点はより重要となってきた。長野県の北部に位置する野沢温泉村は地域課題に対して正面から取り組みはじめた。

村は少子化の影響で、2013(平成25)年4月から、保育園、小学校、中学校の全ての学年が1クラスになった。人口減少や少子化が進んでも、小さな村がキラキラと輝き続けるために、村は全国に先駆けて、積極的な対応策を採用した。地域の中で人が生まれ、成長し、地域を担う人を育成する教育プログラムを作ろうと、村では野沢温泉学園を開園し、野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育をスタートさせた。

村は全国でも屈指の豪雪地帯であり、温泉とスキーを中心としたむらづくりを行ってきた。村の基幹産業であるスキーを学園の特色のある教育の1つに位置づけ、独自性を生み出そうとしている。そこで、野沢温泉とスキーとの関係について歴史を紐解き、野沢温泉の魅力や独自性を考察する。

2014(平成26)年度には、北信州の玄関口として、北陸新幹線の飯山駅の開業が予定されている。首都圏や北陸からのアクセスの便が飛躍的に良くなり、観光、居住空間及び生産活動における立地条件が大幅に改善され、向上するであろう。野沢温泉の魅力や独自性の発信、野沢ブランドの確立が求められており、今まさに新しい時代がはじまろうとしている。先駆的取り組みをはじめた野沢温泉村を通して、地域振興と人材育成について考察するとともに、厳しい状況にあるスキー場およびスキー産業の進むべき道を模索する。

1. 野沢温泉村の概要⁵⁾

長野県下高井郡野沢温泉村は長野県の北部に位置する。下高井郡は山ノ内町、木島平村、野沢温泉村の1町2村から成り立つ。野沢温泉村南側は毛無山の尾根を境に木島平村に接し、西側は千曲川を隔てて飯山市と境をなしている。また、北側及び東側は高倉山の尾根境から毛無山東斜面にかけて栄村と接しており、海拔高度差は、村北部の明石(300m)から、毛無山(1,650m)に及び山谷形で起伏が多い地形となっている。東に三国山脈の傍系としてそびえる毛無山を頂点として、西に流れる千曲川に傾斜し、村内に流れる一級河川の赤滝川、湯沢川、池の沢川はいずれも毛無山に源を発して千曲川に注いでいる。

2013年7月1日現在の村の人口は3,835人、世帯数は1,276世帯である⁶⁾。村の総面積は57.95km²、東西9.1km、南北11.5km、周囲38.2kmとなっており、村土はその50.7%を山林が占め(1996(平成8)年県統計書)、景観の良さなどから上信越高原国立公園に指定されており、それらの一部を含む297haが現在スキー場区域となっている。

村の気候は、アジア大陸からの影響を受ける典型的な日本海側気候で、年平均気温は9.9℃、年間降雨量は1,719mm、1日最大降雪量は82cm(1996(平成8)年)と、全国でも屈指の豪雪地帯である。

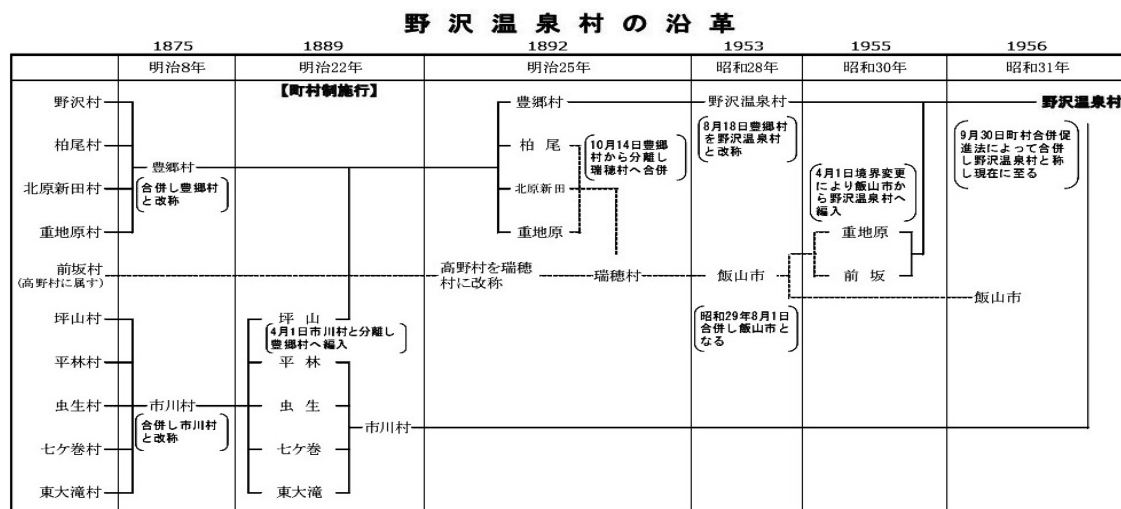
郷土の温泉である野沢温泉が「湯山村」として歴史の表面に現れてくるのは、鎌倉時代中期の1272(文永9)年⁷⁾が最初であり、江戸時代初期にはすでに24軒もの宿屋があったといわれ、1928～1930(明治3～5)年には24,863人の湯治客が訪れていた⁸⁾と記録されている。

このように、古くから温泉地として栄えてきた村は、その後、1912(明治45)年に飯山中学校の生徒であった村出身者が初めてスキーを滑り、1923(大正12年)には野沢温泉スキー倶楽部が発足し、スキー場の開発とスキーヤーの誘致、宣伝に努力するなど温泉とスキーを中心としたむらづくりが始まった。

また、1923(大正12)年の飯山鉄道の桑名川までの開通、1925(大正14)年の長野電鉄の屋代・木島間の開通など村までのアクセスの改善を背景に、数々のスキー競技会の開催などにより、野沢温泉スキー場は着実に発展を遂げてきた。

ここで、図表1 野沢温泉村の沿革を示す。

図表1 野沢温泉村の沿革



(出所) 野沢温泉村総務課企画財政係編集(2012)『野沢温泉村の統計』野沢温泉村発行,p.6

野沢温泉村 HP : <http://www.vill.nozawaonsen.nagano.jp/gov/toukei23.pdf>

1871(明治4)年の廃藩置県が布告された当時は、野沢村と称し一村であったが、1875(明治8)年、野沢村は、柏尾村、北原新田村および重地原村の三か村とともに合併して豊郷村となった。この合併は長野県権令の指導によってなされた。その後、1889(明治22)年、豊郷村は隣村の坪山村と合併した。この合併は市制町村制の実施に際し行われた⁹⁾。

1953(昭和28)年に豊郷村から「野沢温泉村」¹⁰⁾に村名が変更され、1956(昭和31)年には市川村と合併し、現在の野沢温泉村が誕生した。

昭和30年代には公共下水道をはじめ道路などの社会基盤の整備を進める一方で、1963(昭和38)年にはスキー場が施設を含めてすべて村営となり、住民と行政とが一体となった観光地開発が進み、

一層の充実が図られてきた。

また、1971(昭和 46)年 2 月にはオーストリアのサンクト・アントン村と姉妹村提携が結ばれ、以来、スキー教師交換交流、村民交流、中学生相互交流が行われ、国際親善に役立ってきた。

平成に入ると、村道整備、克雪対策、農業集落排水事業、福祉施設の充実など生活環境整備を着実に進め、また、高野辰之博士終焉の地を記念したおぼろ月夜の館―斑山文庫―などの教育文化の向上を目指した施策を展開した。さらに、1998(平成 10)年には長野五輪の会場の 1 つに野沢温泉スキー場が選ばれて、世界的に野沢温泉の名前が広がった。それに伴い、上信越自動車道信州中野 IC 及び豊田・飯山 IC、新幹線が長野市まで開通した。

2014(平成 26)年度には、北信州の玄関口として、北陸新幹線の飯山駅の開業が予定されている。首都圏や北陸からのアクセスの便が飛躍的に良くなり、観光、居住空間及び生産活動における立地条件が大幅に改善され、向上するであろう。野沢温泉の魅力や独自性の発信、野沢ブランドの確立が求められており、今まさに新しい時代がはじまろうとしている。

2. 日本および長野県スキーの発祥

野沢温泉村は温泉とスキーを中心としたむらづくりが行われてきた。本節では野沢温泉とスキーとの関係について考察する前に、日本および長野県におけるスキーの歴史を紐解き、野沢温泉の魅力や独自性を考察する手掛かりとする。

2011(平成 23)年はスキー伝来 100 周年、2012(平成 24)年は長野県スキー発祥 100 周年であった。スノーリゾート新世紀に向けて、各地でさまざまなイベント、博物館特別展が催され、記念誌が発行された。2011 年 1 月 20 日から 3 月 27 日で諏訪市博物館特別展「霧ヶ峰スキーことはじめ―スキー場開拓にかけた諏訪人たちの熱き思い―」が開催(展示資料を収録した記録集は 2012 年 2 月に発行¹¹⁾)、2012 年 1 月、飯山市は『長野県・飯山スキー100 周年記念飯山スキー100 年誌』¹²⁾を発行、2012 年 2 月、野沢温泉スキークラブが編集した『スキー伝来 100 年野澤のスキー スキークラブ創立 90 周年/スキースクール開校 60 周年記念』¹³⁾は野沢温泉いで湯とスキーの郷活性化協議会によって発行、2012 年 3 月、『山ノ内町スキー発祥 100 周年記念史 今 伝えたいこと』¹⁴⁾は山ノ内町・山ノ内町スキー発祥 100 周年記念事業実行委員会が編集・発刊した。

日本におけるスキーの本格的導入¹⁵⁾は 1911(明治 44)年 1 月のレルヒ¹⁶⁾(Theodor Edler von Lerch)氏によるものである。彼はオーストリア・ハンガリーの軍人で、日本の軍隊視察を目的として 1910 年 11 月末に来日し、翌 1911 年、当時の陸軍第 13 師団(現新潟県上越市高田)でスキー講習を行った。当時、冬季の野外スポーツ活動はほとんど存在しなかった積雪地では、軍人などによる一般向け講習会を通じてスキーが急速に普及した。この過程で「スキー場」という人工的なスポーツ空間が形成されるようになった。とはいえ、日本では第二次世界大戦前にはスキーリフトが存在せず、練習場というスキー場でのスキーに加えて、ツアースキー(山スキー)もある程度の地位を有していた¹⁷⁾。

長野県のスキーの始まりは、1912(明治 45)年、1 月に新潟県高田連隊における講習会から帰県した市川達讓(いちかわたつじょう: 妙専寺住職、飯山中学校教諭)氏が飯山町(現飯山市)の飯山城跡において滑走したのが最初¹⁸⁾と言われている。

日本で最初のスキーガイドブック¹⁹⁾である『スキーとスケート』(鉄道省(1924))では、前半はスキーについて書かれており、スキーの概要とスキー場(練習場)についての説明やツアーコースを示した地図が掲載されている。休日行楽者のために作られており、どこに行くべきか、鉄道路線(東海道線、信越線、磐越線、奥羽線、東北線、陸羽線、羽越線、北陸線、山陰線)に沿ってスキー場を紹介、北海道、さらには樺太のスキー場も記載される。長野県内のスキー場は、飯山町(現飯山市)、野沢温泉、野尻湖の 3 ヶ所が取り上げられている。

野沢温泉に対する『スキーとスケート』での説明の原文は以下のとおりである。

「飯山のスキーは早晚野澤に^(ママ)奪れるといふ人がある。飯山に温泉が湧かない以上何とも致方のない運命だと説明して呉れた。

飯山から先へ四つ目の驛上境で下車して東南へ約卅町行けば野澤温泉場である。或は飯山から自動車があるといふ。

スキー季節 十一月下旬から翌年四月上旬迄で雪質は粉雪でスキー滑走に良好である。平均七尺位積る。時には一丈二尺位迄積るといふ。

スキー練習場 第一練習場(温泉場の東約一町に在る。北西に向いた斜面で長さ三町、廣さ五町歩)。第二練習場(前者の奥約一町、北向斜面、長さ十町、廣さ約百町歩)。第三練習場(温泉場の北約一町、南向斜面、長さ五町、廣さ約百町歩)

旅館 桐屋^(ママ)(法制大學スキー部本部)、酒屋、常盤屋、龜屋、島屋等二十三軒あって一時に四百人位迄は収容出来る。宿泊料は一泊一圓半から三圓位。

野澤温泉は無色透明の硫黄泉で温度が高く泉量が豊富である。^(ママ)法制と専修の大學生が多く茲に集まる。」²⁰⁾

新たなスキー100周年に向けて、次節で、野沢温泉スキー場の生成から地域振興を考察する。

3. 野沢温泉スキー場の生成

レルヒ氏にスキーの技術指導を依頼した、第13師団長であつた長岡外史²¹⁾陸軍中將はスキーの実態を知ると、これこそ豪雪地帯の生活に不可欠の利器と認識²²⁾し、軍隊におけるスキーの普及とともに、学校・官公署・一般へのスキー普及に意を尽くした²³⁾。

1911(明治44)年9月4日、第13師団渡邊小太郎参謀長から、スキー術講習に関する件通牒が積雪地である各県知事宛に出され、これに対して長野県の参加者6名は次のとおりであつた²⁴⁾。

甲種	松本歩兵第五十聯隊歩兵中尉	倉石忠一郎
	同	歩兵軍曹 両角市重
	同	歩兵伍長 宮下袈裟之助
乙種	下高井郡堺村小学校訓導	高橋米作
	飯山中学校教諭	市川達讓
	諏訪郡岡谷小学校訓導	波間長重 ²⁵⁾

1912(明治45)年、1月に新潟県高田連隊における講習会から帰県した市川達讓氏が飯山町(現飯山市)の飯山城跡において滑走したのが長野県のスキーの発祥であり、飯山中学校でスキーを習得した野沢温泉の中学生(富井英士、竹井(河野)健三、河野賢、森赳夫ら)²⁶⁾が、3月の春休みで帰省し、向林で初めてスキーを滑ったのが、野沢温泉でのスキー発祥である²⁷⁾。

翌1913(大正2)年、新潟県高田の第1回全国スキー大会に飯山中学校生徒富井英士、森赳夫らが出場した²⁸⁾。

1923(大正12)年2月、第1回全日本スキー選手権大会が小樽で開催され、長野県から片桐武夫、富井宣威ら飯山中学校生徒4名が出場した²⁹⁾。同1923年12月、野沢温泉スキー倶楽部が創立された³⁰⁾(片桐武三初代会長、片桐知從副会長、藤沢璋三顧問)³¹⁾。

翌1924(大正13)年1月、法政大学スキー山岳部が来野した。これが、野沢温泉スキー場の開場であつた³²⁾。同1924年12月、御犬山スキー場に固定ジャンツェ(ジャンプ台)が建設され、翌1925年、日影スキー場に練習用ジャンツェを建設した。さらに、1928(昭和3)年、日影スキー場に50m級野沢ジャンツェが建設された³³⁾。野沢温泉スキー場が全国にその名を広める基礎が形成されつつあつた。スキー場の整備が進んだ結果、1930(昭和5)年、全国規模のスキー大会である第5回明治神宮スキー競技会が野沢温泉スキー場で開催された。

同 1930 年、オーストリアのハンネス・シュナイダー(Hannes Schneider)³⁴⁾氏が来日、野沢温泉村での講習は 3 月 23 日、24 日の両日に行われた。

野沢温泉スキー場の生成は、レルヒ氏、ヘルセツ(Olaf Helset)氏、シュナイダー氏といった、世界のトップレベル、一流のスキー技術や知識を持った人から教えを受け、貪欲に知識を吸収することからスタートしている。技術的知識・情報、やり方、こつ、といったノウハウ(know-how)を吸収し身につけた人が、日本のトップ、さらには世界へ向けて積極的にチャレンジする。世界を肌で感じ、経験を多く積んだ視野の広い人が、次世代の人材育成を重視することで地域の力を強め、人の和を広げていく。視線は内向きではなく、外を向き、新しいものに対する好奇心の強さや先進性はまさに起業家精神そのものである。こうした野沢スピリット、野沢 ISM(主義)は野沢温泉スキー場の発展に大きく寄与している。

4. 野沢温泉スキー場発展の原動力

第二次世界大戦直後には、進駐軍によって札幌藻岩山と志賀高原丸池にわが国最初のスキーリフトが建設された³⁵⁾。1947(昭和 22)年、志賀高原丸池のスキーリフトは完成した。その後 1952(昭和 27)年、丸池スキー場は進駐軍による接收が解除され、長野電鉄が丸池スキー場およびスキーリフトの払い下げを受けた。1949(昭和 24)年、草津温泉は民間として日本では第 1 号のスキーリフトを作った³⁶⁾。1950(昭和 25)年 12 月、野沢温泉で 200m のリフトが完成、長野県で 2 番目となるスキーリフトであった。菅平でも同 1950 年 12 月、250m のロープトウが建設され、昭和 30 年代に入ると各スキー場で建設ラッシュが起きた³⁷⁾。

新しい技術や知識を積極的に取り入れ、起業家精神旺盛な野沢スピリット、野沢 ISM(主義)は、戦後魅力あるスキー場の形成という点において力を発揮した。本節では、第一リフト建設というピンポイントからスキー場の開発、野沢温泉スキー場発展の原動力、源を考察する。

片桐匡³⁸⁾氏は野沢温泉のリフト建設について「第一リフト建設の思い出」として次のように記述している³⁹⁾。

「スキー場としての発展のためには、どうしてもスキーリフトが必要であるということを考えなければならぬ時代がくるように思えた。そして新しい時代の幕あけと、それに対応して行くためには、野沢のスキー場にも早くスキーリフトを作ることが必要であると思った。【思い】しかしそれには莫大な建設費が必要なのである。」【壁】

「だが、スキーヤーを上へ運び上げるリフトは料金を取ってもよいのであるから、いつかは回収がつく筈だと思った。【予感】(省略)経験したことのない、見たこともない、そして乗り物に乗って上るなどぜいたくなスキーであり、その上膨大な建設費のかかるものなど、賛成するまでにはかなりの時間と説明が必要であった。【説得】(省略)スキーリフトに対する認識が深まり、何とかやって見ようという気運が高まってきた。昭和 25 年の秋である。」【打開】

「場所は日影スキー場のジャンプ台の脇がいいと思った。【予感】(省略)むろんリフトを作ってくれる会社などあろう筈もないので、どうして作っていいのかさえわからなかった。(省略)長野の鹿島建設の支店長を知っていたので、来て貰って一応現地の測量をしたりして相談をして見た。しかし二百万円近くも金がかかるということで二の足をふまざるを得なくなった。」【壁】

「鉾山に荷物を運搬している牽索道がある。あれと同じではないか。あれにスキーヤーが腰かけて乗って運ばればいいのか。【ひらめき】

「須坂の奥には小串鉾山などもある。(省略)小串鉾山に行って事情を話し、索道の技術者を野沢に派遣して貰ったという案である。【ひらめき】当時 29 才の私一人では心もとないので、野沢スキークラブの副会長であった山崎英次氏に同行して頂いて、小串鉾山に交渉に出かけた。【協力】ところが須坂の事務所で小串の現地の所長さんに電話でその趣旨を伝えたところ、すげなく断られてしまった。(省略)さて、困った。どうしよう。【壁】しかし今となってはもう他に方法は考えられな

い。(省略)ともかく強引に山の現地へ乗り込む決心をした。【強行突破】

「(省略)ムリなことを承知で、山崎副会長と二人でついに 10 キロの山道を歩いて、群馬県境を越えて小串鉱山まで行ってしまった。困ったのは所長さんである。索道主任の佐々木さんをぜひとも野沢まで派遣して頂きたいという要望に、佐々木さんが不在になっている間に、もしも事故でも起こされれば自分が責任をとらなければならない。(省略)しかし、私たちの姿を目の前にして、そのまま追い返すわけにもいかない。(省略)いろいろと話し合った結果、それでは日曜日だけ佐々木さんを派遣するので、それでカンベンしてほしいということになった。(省略)【打開】

「それから間もなくして、佐々木さんは索道作りに経験のある大工さんたちを 4、5 人連れて、ほんとうに野沢までやってきてくれた。(省略)【協力】

「12 月に入ってようやく待望のスキーリフトなるもののメドもついてきた。ところが 1 つかんじんのワイヤーがないのに気づいた。【ピンチ】さあどうしたものかとまたまた思案のあげく、群馬県の草津温泉にある硫黄鉱山に電話をして見たら古いものなら使っていないのがあるという(省略)。」

【打開】

「トラックを 1 台チャーターして、そこに私が乗り込んで出かけた。上田を廻って鳥居峠へさしかかると、もうあのあたりは雪が積もっていて、トラックの運行は困難になってきた。上州三原までたどりついたら、ついにその先はもう雪のためトラックは行けなくなってしまった。これで断念したら折角のリフトもオジャンになってしまうのだ。【壁】(省略)私は一人で雪の中を約 4 キロほど歩いて鉱山まで入ることにした。(省略)【強行突破】そこで比較的程度のいい古いワイヤーを譲り受けることができてほっと一息。【打開】だがこれをどうやって三原に待たせてあるトラックまで運ばばいいのか。またまた途方にくれなければならなかった。【壁】

「当時、草津から軽井沢へ小さな電車が走っていて、そこを通過していた。そこで翌朝事情を話してムリやりに駅長さんをお願いして、草津から来た電車を十数分も停めて、乗客を待たせたまま、電気機関車の屋根にそのワイヤーを巻き上げて乗せてしまい、上州三原駅で再びそのワイヤーをおろすことに成功した。ブツブツ云われながらも、ともかく強引にやってのけたものだ。(省略)【強行突破】

「そしてやっとのことで、この 500 メートルの長さのワイヤーを三原からトラックにつけて野沢までたどりついた。さて、今度はこのワイヤーをどうやって日影スキー場まで運ぶのか。【壁】(省略)スキークラブの関係者や学校の生徒たちを動員して、みんなでワイヤーにつかまってお宮の坂を長い列を作って引き上げるというか、持ち上げてやっとのことでこのワイヤーの件は落着いた。【協力】

「こうしてリフトも何とか恰好がついてきたのであるが、荷物を運ぶのと同じであるとはいっても、スキーリフトは人間を乗せて運ぶのであるから、もしも途中で搬器が滑ったり落ちたりしてしまったんでは大変なことになると思ったので、その点がまた心配になってきた。(省略)【予感】

「そこで佐々木さんに、搬器を吊り下げているクリップ(ワイヤーに搬器を止める金具)をダブルにしたらどうだろうという提案をした。【ひらめき】(省略)このダブル・クリップは後に佐々木式とよばれて、あとからできたリフトに沢山使われるようになった。(省略)」

「雪は降ってくる。何とか完成させなければと、連日強行作業は続いた。【強行突破】日曜日だけ派遣して貰うという約束だった佐々木さんも、いつの間にか野沢につめつきりになってしまった。」

【協力】

「こうして野沢の第一リフトはでき上った。(省略)リフトはできたものの、かんじんなのは滑って下るコースである。中級、上級はお犬さんの方を廻ればいいのかであるが、(省略)問題は初心者コースだ。【予感】(省略)この初心者コースをつくるためには雑木林を切り開いて、婦人会の杉林を切らなければならなかった。(省略)ここにコースを開けることは無謀にも等しいことである。【壁】だが、何としてもこのコースは必要である。【思い】(省略)何とかお許しをというわけで関係者に一

応の了解を求め、スキークラブの若手の有志が出勤してこの伐採にあたることになった。【協力】もう辺りは雪が 30 センチも積もっていた。その雪の中で伐採作業は進められ、大きな杉が次々と倒されてコースが開かれていった。(省略) 【強行突破】

「リフトの技術者を迎えることも大きな課題であった。【壁】スキーリフトの知識をもったエンジニアを望み得べきでもなかったが、機械とか電気に関係していたものならばもっとも適任ではないか【予感】ということで、河野一男さんに白羽の矢が立てられた。河野さんは満州鉄道に勤務していたエンジニアなので、ぜひということでも要請してリフト主任技術者として迎えることができた。」

【協力】

「かくして野沢のスキー場にとって歴史的なスキーリフトの第一号ができあがったわけであるが、その建設費は凡そ 120 万円ほどだったと思う。しかしこの金はスキークラブにとっては決してその調達も容易なものではなく、スキークラブ会長の富井宣威さんをはじめ幹部の数人の方々によって金融機関から借入れをしたものであった。自分たちのスキー場に自分達の手によって開発し守って行こうという考え方がスキークラブとしての基本的な態度であったので、外部からの資金援助は一切考えず、どのような苦勞をしてもこのリフトを守り、育てて行こうと思っていた。」【思い】

なんというタフさ、突破力であろうか。いくつもの壁にぶつかり跳ね返されても動じない。ピンチに陥っても打開する。思いをかたちにするために考え抜くことで、ひらめきが生まれる。ひらめきを大切にすると、いい予感、悪い予感が思い浮かぶ。対応策、打開策を再度考え抜き、目標の達成に向けて行動する。これしかないと思ったら、協力を求め、説得し、強行突破を試みる。すべては野沢への思い、野沢温泉を最良のスキー場とするために考え抜くことから生まれている。

現在ではスキー場にスキーリフトは配置されているのが当たり前である。しかし長野県 2 番目のスキーリフトである野沢の第一リフトの建設までの道のりは想像を絶する厳しさであり、その厳しさに立ち向かった人々の力強さは計り知れない。

野沢の“^{ほろから}場力”⁴⁰⁾は、野沢温泉という大地そのものが持つ、他国、他県、他地域にはない魅力、独自性と、新しい技術や知識を積極的に取り入れ、起業家精神旺盛な野沢スピリット、野沢 ISM(主義)であろう。大地から渾渾と湧き出す高温で高品質な温泉と、深深と降る豊富で上質な粉雪ともに、先人から綿綿と継承される野沢への熱い思いと努力は積み重ねられている。この第一リフト建設のストーリーは、野沢温泉スキー場にとってほんの一部であり、ピンポイントであるが、こうしたいくつものストーリーの積み重ねが野沢の強さとなり、地域振興、さらには野沢ブランドの源となる。

本節では、新たなスキー100周年に向けて、野沢温泉スキー場の第一リフト建設というピンポイントから歴史を紐解き、スキー場の開発、野沢温泉スキー場発展の原動力、源を考察した。

5. 野沢温泉学園の誕生⁴¹⁾

(1) 野沢温泉学園誕生の契機

人口減少は日本全体に大きな影響を及ぼしている。野沢温泉村も例外ではない。村の人口は、2000(平成 12)年に 4,835 人であったが、2012(平成 24)年には 3,908 人となり、約 2 割減少している。図表 2 野沢温泉村の人口の推移を示す。

図表 2 野沢温泉村の人口の推移

年		男	女	計(人)	世帯数
2000	平成 12	2,338	2,497	4,835	1,388
2001	平成 13	2,285	2,455	4,740	1,385
2002	平成 14	2,254	2,431	4,685	1,381
2003	平成 15	2,224	2,414	4,638	1,373
2004	平成 16	2,191	2,369	4,560	1,375
2005	平成 17	2,156	2,324	4,480	1,372
2006	平成 18	2,119	2,279	4,398	1,366
2007	平成 19	2,088	2,233	4,321	1,344
2008	平成 20	2,034	2,207	4,241	1,332
2009	平成 21	1,974	2,177	4,151	1,328
2010	平成 22	1,919	2,131	4,050	1,315
2011	平成 23	1,898	2,091	3,989	1,305
2012	平成 24	1,862	2,046	3,908	1,294

(出所)総務省自治行政局『住民基本台帳人口要覧』各年版より筆者作成 基準点は各年 3 月 31 日

人口減少に向き合い、地域振興に結びつけるため、本節では村が創設した野沢温泉学園という先駆的な取り組みに焦点をあて、学園誕生の契機を考察する。

地域の中で人が生まれ、成長し、地域を担う人を育成する教育プログラムを作ろうと、村では 2013(平成 25)年 4 月、野沢温泉学園を開園し、野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育をスタートさせた。

少子化の影響で、2013(平成 25)年 4 月から村では、保育園、小学校、中学校の全ての学年が 1 クラスになった⁴²⁾。どの学年も 1 クラスになったことから、保育園の 3 年間、小学校の 6 年間、中学校の 3 年間、合計 12 年間、学級替えが無く、同じ仲間とずっと学校生活を送ることになる。

子どもたちの人間関係が一端こじれると、今までのように学級替え等でリセットすることもできない。こじれた人間関係は、子どもの学習意欲を損なうばかりでなく、いじめや不登校を生み出し、教育環境を悪化させてしまう。このことから、子どもたちの良い人間関係づくりを最も大切にする指導体制を保小中で実施する。

今後も少なくなることが予想される村の子どもたち、今まで以上に、子どもたち一人ひとりに、しっかりと基礎学力と豊かな人間性を育み、将来の野沢温泉村を背負っていける力を、また、村内だけでなく日本や世界で活躍できる力をもった子どもたちを育てていきたい。そのためには、村の保育園、小学校、中学校の保育や教育の実践力をより高め、今まで以上に中身の濃い、質の高い教育を実施できる新しい教育体制づくり、新しい幼児教育も含めた新しい教育システムづくりが必要という考えから、村の教育改革がはじまった。

新しい野沢温泉学園の教育目標は、「一ふるさと野沢温泉村を心に刻み 心を世界に拓き 心豊かな人間性を育む教育」である。この新しい目標を設定するにあたり、村では村民の一部にアンケート調査を行った。

「野沢温泉村の子どもたちにどんな子どもに育ってほしいですか？」という質問に対する、一番の願いは、「ふるさと野沢温泉村を愛する子どもになって欲しい」であった。そのため、教育目標の最初に「ふるさと野沢温泉村を心に刻む」を掲げた。

二番目に、村には、海外で活躍したオリンピック選手が大勢存在する上に、オーストリアのサンクト・アントンとの交流や村を訪れる外国の方々が年々増えていることから、世界に目を向けた広

い視野をもった子どもの育成を願い「世界に心を拓き」とした。

三番目は、アンケートの結果「逞しく心の優しい思いやりのある子どもになって欲しい」という多くの皆さんの願いを受けて「心豊かな人間性を育む教育」とした。

図表 3 冬季オリンピック開催地と野沢温泉村の冬季オリンピック出場選手一覧 を示す。冬季オリンピック出場選手総数は 23 名である。そのうち、2 回出場者 6 名、3 回出場者 1 名のため、重複出場者数を除くと、冬季オリンピック出場選手実数は 15 名である。

図表 3 冬季オリンピック開催地と野沢温泉村の冬季オリンピック出場選手一覧

回数	開催年	開催地	開催国	野沢温泉村の冬季オリンピック出場選手
1	1924	シャモニー・モンブラン	フランス	
2	1928	サン・モリッツ	スイス	
3	1932	レークプラシッド	アメリカ	
4	1936	ガルミッシュ・パルテンキルヘン	ドイツ	
5	1948	サン・モリッツ	スイス	
6	1952	オスロ	ノルウェー	
7	1956	コルチナ・ダンペッツォ	イタリア	杉山進
8	1960	スコーバレー	アメリカ	佐藤和男
9	1964	インスブルック	オーストリア	佐藤和男 富井一
10	1968	グルノーブル	フランス	佐藤和男
11	1972	札幌	日本	松村元治 富井澄博 古川年正 片桐美雪
12	1976	インスブルック	オーストリア	富井澄博 片桐幹雄
13	1980	レークプラシッド	アメリカ	片桐幹雄
14	1984	サラエボ	ユーゴスラビア	
15	1988	カルガリー	カナダ	
16	1992	アルベールビル	フランス	河野孝典 富井剛志
17	1994	リレハンメル	ノルウェー	河野孝典 西方仁也
18	1998	長野	日本	森敏 富井彦 富井剛志
19	2002	ソルトレークシティ	アメリカ	森敏 富井彦 畦上大地
20	2006	トリノ	イタリア	上野修
21	2010	バンクーバー	カナダ	
22	2014	ソチ	ロシア	
23	2018	平昌	韓国	

(出所) 北信州スノースポーツ活性化協議会企画・製作『スキーが変えた冬の暮らし 未来へつなぐ「スキー100年」～スノーリゾートへのあゆみ～』p.17 より筆者作成

河野孝典選手は、1992(平成4)年、フランスのアルベールビルオリンピックのノルディック複合団体で金メダル、続く1994(平成6)年、ノルウェーのリレハンメルオリンピックでも同一種目で金メダル、さらにノルディック複合個人でも銀メダルを獲得したメダリストである。

河野選手がメダリストとなったことは、子どもたちにとってメダリストが遠い存在ではなく、身近な存在となった。それによって世界のトップ選手としてオリンピックで活躍することが実現可能な目標となった。

1998(平成10)年、長野での冬季オリンピックの開催によって、長野が「Nagano」として世界に発信されたことは非常に大きな意味がある。長野のスノーリゾートはオリンピックという最大で最

高の国際舞台を経験し、さらに本格的な山岳リゾートを目指す上でも、オリンピックは語り継ぐべき重要で中核となるコンテンツであることは間違いない⁴³⁾。村はバイアスロン競技の開催地となり、スノーリゾートの聖地となった。海外で活躍した数多くのオリンピック選手(オリンピック)が村にいますが、野沢の“場力”であり、強さである。

学園の教育目標を設定するにあたり、村では村民の一部にアンケート調査を行い、村民の思いや考えを活かし、大切にしている。その理由は、地域、家庭が今まで以上に一体となり、子どもたちへの願いを共有し、協働して関わることが、子どもたちの心豊かな人間性を育み、将来への夢と希望を抱いて、逞しく生きる子どもの育成につながると考えているからである。

(2) 特色のある教育と新しい教育システム

地域の中で人が生まれ、地域を担う人を育成する教育プログラムを作ろうと、地域性を生かした特色のある教育、村ならではの教育として4つの分野での教育活動を実施する。さらに高校との連携教育の推進を、5つ目として併記する。

① 豊かな国際感覚を身に付ける「英語学習」(教育課程特例校)

スキーで結ばれた姉妹都市、オーストリアのサンクト・アントン村とは毎年相互に訪問交流が行われ、中学生が海外体験活動を通して世界に視野を広げる機会となる。また近年海外からの観光客の増加や海外交流の機会が増える中、保育園に外国人英語助手を配置して英語遊びの導入を進め、保小中高と一貫した英語教育の実現を推進し、英語という言語活動を通したコミュニケーション能力の向上を図ることによって、世界に視野を広げると共に豊かな国際感覚を備えた子供の育成を目指す。

② 地域の特性を生かす「スキー学習」(2013(平成25)年8月、教育課程特例校申請)

スキーの聖地、スキー産業の先進地として、スキーを野沢温泉学園の園技とする。学園の教育課程に「スキー科」を新たに設け、学園職員と地域指導者が一体となって積極的にスキー学習に取り組み、冬季間の子どもたちの健康増進を図ると共にスキーを楽しみながら基礎的な技術を身に付け、生涯にわたって、スキーを楽しむことのできる子どもを育てる。冬の大自然と触れ合い、スキーの楽しさと醍醐味を存分に味わいながら心身を鍛えられるスキー学習は、村の特色を活かす大切な教育活動であり、村の誇りであるスキーを継承し、村のスキー産業を担う人材の育成につながる大事な取り組みである。

③ 夢や視野を広げる「交流体験学習」

学園内での保、小、中の相互交流の推進・村内の方々との交流の推進・他地域や世界との交流推進を図る。教科学習や行事、清掃活動など積極的に園児、児童、生徒の相互交流を行い、先輩を通して自分の成長のモデルを、後輩を通して自分の成長のあしあとを確認し合う。ふるさと学習やキャリア教育を中心に地域の方々との交流を進め、村に根を張って生きておられる方々から村民としての生き方を学ぶ。交流の機会を村内から全国に、世界に広げ、誰とでも積極的に心を拓いて語り合える広い視野とコミュニケーション能力を育む。

④ 地域の自然や文化を学ぶ「ふるさと学習」

ブナの原生林が広がる上ノ平高原や千曲川など、豊かな自然と触れ合う学習を推進すると共に、国の重要無形民俗文化財の道祖神祭、湯沢神社例祭や各地域に伝わる古式豊かなお祭り、更には、つる細工や野沢菜など、村の文化や産業などについて学ぶことを通して、村の良さを知り、村の抱える課題を学び、地域に根を張って頑張っている人々の生き方等々から、村民としての生き方を学び、村に愛着と誇りを抱く心を育てていく。

⑤ 高校との連携教育の推進

保小中一貫教育を中心に据え、既に 2009(平成 21)年から始まった飯山北高校と保小中高と一貫した英語教育の研究実践を通じたカリキュラム作りと英語学習の推進を図ると共に、飯山北高校が実施している算数・数学つまずき実態調査を活かした算数・数学の学習指導の充実を図る。また飯山高校のスポーツ科とのスキー学習やスキークラブの交流、さらには、村に隣接する地域に農場をもつ下高井農林高校との農業実習を通じた連携教育の在り方を検討し、隣接する地域高校との連携教育を推進する。

地域性を生かした特色のある教育、野沢温泉村ならではの教育を実施するために、野沢温泉学園の教育を推進する新しい教育システムが考え出された。図表 4 野沢温泉学園の新しい教育システムを示す。

図表 4 野沢温泉学園の新しい教育システム

連携教育	一貫教育「野沢温泉学園」				連携教育
家庭での生活	保育園での生活	小学校での生活	中学校での生活	卒業後・高校での生活	
3年間	3年間	6年間	3年間	3年間	
家保ジョイント期 (家庭～年少)	保小ジョイント期 (年長～小1)		小中ジョイント期 (小6～中1)	中高ジョイント期 (中3～高1)	
人の土台形成期	学びの芽生え期	学びの定着期	学びの充実期	学びの自立期	

(出所)野沢温泉村教育委員会(2013)「地域と共に創る新しい教育 野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育 野沢温泉学園「のぞわ保育園 野沢温泉小学校 野沢温泉中学校」施設分離型一貫教育」平成 25 年 4 月,p.8 <http://www.vill.nozawaonsen.nagano.jp/living/ikkankyoku.pdf>

学園のこの新しい教育システムは、保小中 12 年間を、ジョイント期を大切に切れ目のない指導で一貫教育を行い、子どもの誕生から保育園の入園までの家庭との連携、中学校を卒業した後の隣接する地域高校との連携を大切に、子どもたちが野沢温泉村で生活する 0 歳から 18 歳までを見守った新しい教育システムである。

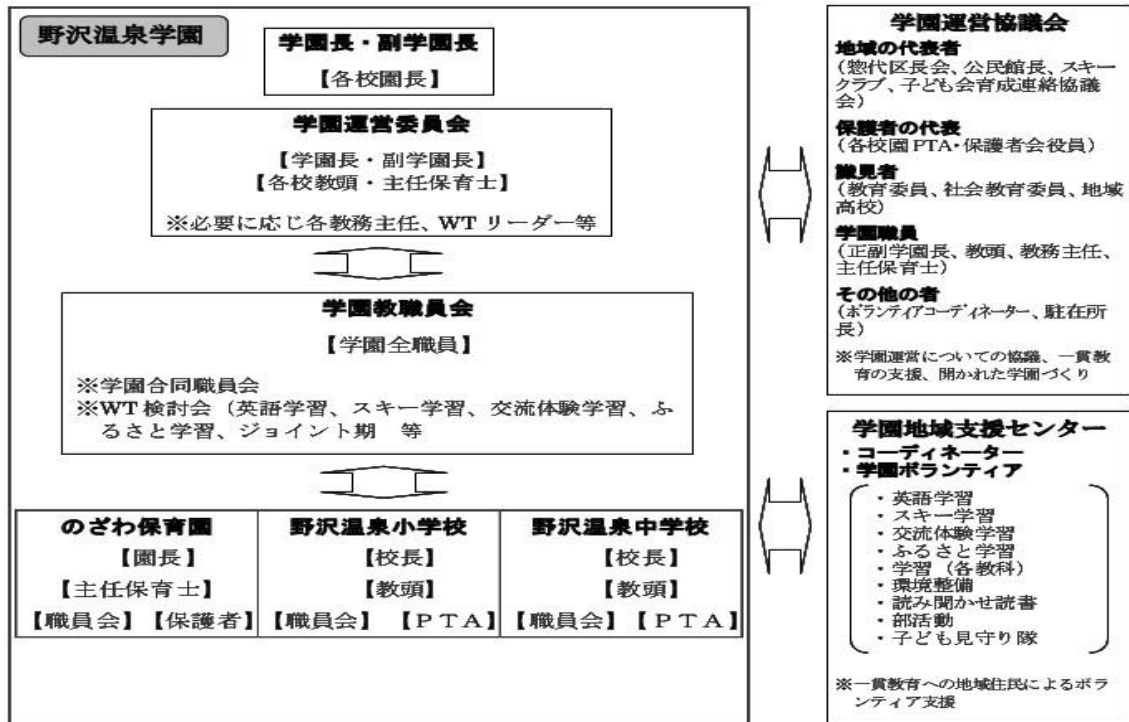
保育所(保育園)は児童福祉法を根拠法令とし、学校教育法を根拠法令とする小中高とは異なるが、村の先進性は、従来の枠組みを超えて、野沢温泉学園を創設し、野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育を開始したことにある。校種の変わる節目で起こる小 1 プロブレムや中 1 ギャップ⁴⁴⁾が全国的に問題となる中、村の試みは問題解決の 1 つの筋道を示すものであろう。

保育園、小学校、中学校がそれぞれの目標のもとに運営することは部分最適化であるが、学園の誕生により、学園全体の目標が設定され、目標達成に向けて行動することは学園の全体最適化である。それが学園の創設によって生まれた強みであり、価値連鎖となって、子どもたちの未来、村の未来を切り開く礎となるであろう。

(3) 新しい学園運営組織

村で実施する一貫教育は、のぞわ保育園、野沢温泉小学校、野沢温泉中学校を総称して野沢温泉学園とし、隣接している校舎や職員体制は別々だが、学園長、副学園長を中心に一貫した保育と教育活動を行う。学園長は池口正博野沢温泉中学校長であり、副学園長は堀籠敦野沢温泉小学校校長と河野葉子のぞわ保育園長である。学園の運営組織図として、図表 5 新しい学園組織を示す。

図表 5 新しい学園運営組織



(注) WT はワーキングチームの略号で、「英語学習」、「スキー学習」、「交流体験学習」、「ふるさと学習」、「ジョイント期」の 5 つがある。

(出所) 野沢温泉村教育委員会(2013)「地域と共に創る新しい教育 野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育 野沢温泉学園「のぞわ保育園 野沢温泉小学校 野沢温泉中学校」施設分離型一貫教育」平成 25 年 4 月,p.10 <http://www.vill.nozawaonsen.nagano.jp/living/ikkankyouiku.pdf>

保、小、中の全職員が同じ野沢温泉学園の職員として、教育目標や願う子ども像、教育内容や指導方法、配慮事項、子どもたちの様子などの情報を共有し、同じ思いで子どもたちを見守り、一貫した指導体制のもとに保育や教育活動を展開し、子どもたちのあらゆる可能性を伸ばしながら、子どもと先生が共に学び合い・育ち合う学園づくりを目指している。

人口減少に向き合い、地域振興に結びつけるために今、何をすべきか。村では地域の中で人が生まれ、成長し、地域を担う人を育成する教育プログラムとして、野沢温泉学園を創設し、新しい教育システムに着手した。大切な野沢温泉村、この小さな村が輝き続けるため、地域振興に結びつけるために、人材育成に真っ向から取り組み始めたのである。

むすびにかえて

日本には美しい四季がある。長野県は南北に長く、桜の開花は南から北へ、麓から山へ駆け上がる。秋の紅葉は北から南へ、山から麓へ駆け下りる。3,000m 級の山々には夏でも雪があり、爽やかな風が吹き抜ける。冬には豊富な天然雪があり、さまざまなウィンタースポーツ、スノースポーツを楽しむことができる。

野沢温泉村は、なかでも温泉と雪の恵みを受け、深山のふところにつつまれるという自然環境の中にある。四季は鮮烈なまでの変化を見せ、それが人々の内面に深くかわり、情操、耐性、意志、創造、互助の精神を呼び起こし、村民の気風を生み出している⁴⁵⁾。

村は野沢温泉学園を創設し、子供たちの内に形成されつつある良さを見極め、個性に磨きをかけ、たくましく、心豊かな人間性が育まれていくよう教育目標、願う子供像「一ふるさと野沢温泉村を

心に刻み 心を世界に拓き 心豊かな人間性を育む教育」と定め、教育内容を設定した。それが学園の新しい教育システムであり、今まで以上に家庭、地域社会が深くかかわる新しい一貫教育システムを構築したのである。

学園の教育目標設定において、村民の声に耳を傾け、声を取り入れ目標に組み込んでいくという姿勢は、地域課題に対して積極的にマーケティングを活用している証でもある。さらに村では村民満足度調査⁴⁶⁾を実施することで、村の事業に対し満足しているか、どういう事業が重要だと考えているかを調査し、今後の行政に生かそうとしている。人口減少に向き合い、限られた予算の中で、何をするかという事業の選択と集中は、地域課題を解決していくうえで、今後さらに重要になるであろう。地域課題を解決する1つの手法としてマーケティングを積極的に活用すべきという筆者の考えとまさに合致する村の行動である。

夏野菜であるトマトやきゅうりは年間を通してスーパーに陳列され、今ではいつでも食べることができる。しかし、日本の四季、信州、野沢温泉の「いま・ここ」⁴⁷⁾という時間と空間、すなわち、その時、その場所でしか手に入れることができないもの、旬や季節を感じ、時間を過ごし、体験し、学ぶことこそ、真の豊かさではないだろうか。その真の豊かさを信州、野沢温泉は提供できるのである。それこそが信州ブランドであり、野沢ブランドであろう。

資生堂名誉会長の福原義春氏は、「ブランドは企業文化の結晶」と語っている⁴⁸⁾。その言葉を地域に置き換えれば、「地域ブランドは地域文化の結晶」と言うことができよう。

野沢温泉には語るべき人、文化、歴史があり、“場力”がある。また野沢温泉スキー場は、「日本のスノーリゾートの歴史の見える村民が育てあげたスキー場」⁴⁹⁾である。

野沢温泉スキークラブ片桐幹雄⁵⁰⁾会長は、「100年前、雪がこの地域のマイナス要因・負の遺産となっていた時代から、野沢温泉スキークラブの先代がスキーを通して正に地域の活性化を牽引した功績は、誰もが認める事実であります。経済成長からバブル期を経て、留まることを知らないスキーブームの急成長が、地域を豊かに育て参りました。しかし、急激なスキー離れと日本経済の景気低迷の長期化から、予想をはるかに超えるスキー産業の後退が進んでおります。スキークラブとしてその現状を打破する取り組みとは、正に人材育成であり、人材無くして野沢の未来は無いものと理解しております。」⁵¹⁾と述べ、人材育成をすることで困難で厳しい現実に向き合おうとしている。

また、株式会社野沢温泉河野博明⁵²⁾代表取締役社長は、「スキーが入ってくる前は雪に虐げられ、生計を立てるために、冬の間は出稼ぎに行かなければならなかった。しかしスキーによってこの地域が豊かになり、冬の間も家族が一緒にいることができるようになった」と話す。また「レルヒ氏が学校の先生にスキーを指導したことによって、子どもたちに学校教育を通して猛スピードでスキーが日本中に広がった。学校の先生を指導の対象にしたのは、当時の長岡師団長の大きな決断で、普及の大きなポイントであった」と述べる。さらに「この地域を活性化し、スノースポーツを活性化するために、『私はスキーができる。一緒に行こう』と自信を持って言える人を育てたい」、「オリンピックで活躍できる人材を育てると共に、野沢温泉村を愛し、野沢温泉村を担う人材を育てたい」と話す。やはり鍵は人材育成である。

村はスキーと共に豊かになった。生活が豊かになり趣味が多様化する中、スキーブームで若者皆スキーであったバブル期と比較するとスキー人口は大幅に減少した。ブームではなく、“本物”のスキー文化への昇華と村の基幹産業であるスキーを担う人材の育成は村としては急務である。原点に立ち返り、子どもたちがスノースポーツを「楽しい、面白い、好き」と思うことが重要である。その仕組みを学園職員とスキー指導者が一体となって創りあげる挑戦が、今、はじまったのである。

子どもたちが学びや遊びを通して、冬の大自然と触れ合い、一人称で楽しいと実感することができれば、村の基幹産業であるスキーは息を吹き返すであろう。わたし(一人称)からあなた(二人称)へ、そして彼・彼女・彼ら・彼女ら(三人称)に、その楽しさの輪を広げていくことが、地域の活性

化、地域振興につながっていくのではないか。そのためにまず一人称で楽しいと感じる子どもたちを野沢で育てていくことが大切である。

野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育は、野沢スピリットや野沢ISM(主義)、野沢オリジナルの考えに基づくものではあるが、同システムを村だけで成り立つ単独システムとして、完結させるべきではない。今後、野沢温泉で培われる地域教育への思いとスノースポーツとの結びつきにより、子どもたちが楽しさを実感することができれば、大きな成果を生むであろう。それを長野県全土へ発信し、やがてはスキー大国長野県の復興とスキー産業の復活、そして決してブームではない“本物”のスキー文化へと繋がるきっかけにしていくべきではないだろうか。

野沢の“場力”は、野沢温泉という大地そのものが持つ、他国、他県、他地域にはない魅力、独自性と、新しい技術や知識を積極的に取り入れ、起業家精神旺盛な野沢スピリット、野沢ISM(主義)、さらにスノーリゾートの聖地、スキー産業の先進地であり、海外で活躍した数多くのオリンピック選手(オリンピック)が村に在ることであろう。

大地から渾渾と湧き出す高温で高品質な温泉と、深深と降る豊富で上質な粉雪ともに、先人から綿綿と継承される野沢への熱い思いと努力に原点回帰し、地域振興のために、地道な人材育成こそが問題解決の道となるであろう。

全国で疲弊する村⁵³⁾が多い中、野沢温泉村のチャレンジはこれからの地域振興に対する1つのヒントとなるのではないか。日本各地で市町村合併が繰り返されたが、村民は飯山市との合併による生き残りではなく、村の存続を望み、自立した村としての生き残りを選択した⁵⁴⁾。

村民が作った野沢温泉スキー場が村営化され、その後民営化⁵⁵⁾されたのも、全国のスキー場、長野県内のスキー場が疲弊し、存続が危ぶまれる中で、生き残るための決断である。同様に野沢温泉学園の開園による野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育は、人口減少に村が正面から向き合い、村の存続にかけて、子どもたちの育成を地域全体で取り組まなければ、村の未来はないという強い思いから生まれたものである。

山積する地域課題に対し、村民の声に耳を傾け、解決する手法としてマーケティングを積極的に活用する村の行動力、選択と集中によって健全な財政に向けた取り組み、地域性を生かした特色のある教育と新しい教育システム、長野新幹線の延伸による鉄道交通網の整備による他地域との連携、野沢ブランドの保持と発信等は、野沢の“場力”を持ってすれば成し遂げられると確信する。

人々の思いを形にすることに焦点をあて、1つ1つ積み重ねてストーリーを紡ぎ、地域ブランドを構築するプロセスとして「地域振興と人材育成」に向き合った本論文が、野沢温泉に、そして長野県のスキー場とスキー産業に少しでも寄与できたならば幸いである。

各地域は地の利を生かしたそれぞれの地域ブランドを構築するべきである。それには、地域を愛し、地域を思い、地域に誇りを持って地域の問題に正面からぶつかり、問題解決を成し遂げようとする人を育てなければならない。地域と人が融合し、人材から人財へ進化を遂げたとき、地域の真の強さが生まれ、地域ブランドとして確立するのではないだろうか。

「しあわせ信州創造プラン」⁵⁶⁾(長野県総合5か年計画)に先駆けた取り組みを行う野沢温泉、そして野沢温泉村のこれからに注視していきたい。

＊本稿の執筆にあたっては、
野沢温泉村教育委員会岩上芳宗教育長、
株式会社野沢温泉河野博明代表取締役社長、
野沢温泉スキークラブ片桐幹雄会長、
ペンションシュネー古川(旧姓片桐)美雪女将、
株式会社小賀坂スキー製作所小賀坂道邦代表取締役社長、
白馬五竜スキー場駒谷嘉宏代表取締役社長、
杉山スキー&スノースポーツスクール杉山進代表、
株式会社エボン坂倉海彦代表取締役、
には、多大なご協力を頂きました。心から深く御礼申し上げます。
ただし、本稿における誤りは、すべて筆者に帰することは言うまでもありません。

注

- 1) 本論文では、野沢温泉村、野沢温泉、野沢、の用語を以下のように使い分けた。野沢温泉村は、行政としての取り組みに対して使用し、野沢温泉は、地域の総称として使用し、野沢は、野沢村からの歴史に思いを馳せ、人に着目し、時代の流れに負けない力強さを、地域の魅力、地域ブランドとして表現する際に使用した。
- 2) 古川一郎編(2011)『地域活性化のマーケティング』有斐閣,p.i
- 3) P. Kotler & N. Lee (2007) “*MARKETING IN THE PUBLIC SECTOR A Roadmap for Improved Performance*”, Pearson Education, Inc. (スカイライト コンサルティング訳 (2007)『社会が変わるマーケティング 民間企業の知恵を公共サービスに活かす』英治出版,p. I)
- 4) 『市民タイムス』(2011.12.22)「研究室訪問－85－マーケティング」では、筆者が取り上げられ、マーケティングと公共政策の融合が今後重要になると指摘した。
- 5) 野沢温泉村 HP「野沢温泉村概要」を参照。
<http://www.vill.nozawaonsen.nagano.jp/gov/W006H0000020.html>
- 6) 野沢温泉村 HP <http://www.vill.nozawaonsen.nagano.jp/>
- 7) 野沢温泉村史編纂委員会(1974)『野沢温泉村史』野沢温泉村発行,p.355
- 8) 『明治六年癸酉九月 野沢村温泉書上帳』(野沢惣代文書)には、明治3～5年野沢温泉湯治客数が示されていた。野沢温泉村史編纂委員会(1974)『前掲書』,p.586
- 9) 長野県総務部地方課(1965)『長野県市町村合併誌』市町村編下巻,pp.499-500
- 10) 豊郷村よりも野沢温泉の呼び名が広く使われており、1953(昭和28)年に至り村名変更の声が起こり、公民館が世論調査を行ったところ、野沢温泉村に変更を望む声が圧倒的となり、検討の結果8月18日野沢温泉村と村名が変更された。長野県総務部地方課(1965)『前掲書』市町村編下巻,p.508
- 11) 諏訪市博物館編集・発行(2012)『諏訪市博物館特別展 霧ヶ峰スキーことはじめスキー場開拓にかけた諏訪人たちの熱き思い』
- 12) 飯山市発行(2012)『長野県・飯山スキー100周年記念 飯山スキー100年誌』
- 13) 野沢温泉スキークラブ編集(2012)『スキー伝来100年 野澤のスキー スキークラブ創立90周年記念/スキースクール開校60周年記念』野沢温泉いで湯とスキーの郷活性化協議会発行
- 14) 山ノ内町・山ノ内町スキー発祥100周年記念事業実行委員会編集・発刊(2012)『山ノ内町スキー発祥100周年記念史 今 伝えたいこと』
電子書籍版山ノ内町・山ノ内町スキー発祥100周年記念事業実行委員会『今 伝えたいこと』
<http://yamanouchi-ski100.com/book/>
- 15) 日本スキーの発祥前史については、以下の論文が詳しい。
中浦皓至(2001)「日本スキーの発祥前史についての文献的研究」『北海道大学大学院教育学研究科紀要84』,pp.85-106 <http://hdl.handle.net/2115/288833>
- 16) 新井博(2011)『レルヒ 知られざる生涯～日本にスキーを伝えた将校～』道と書院では、来日以前のレルヒ、来日中のレルヒ、帰国後のレルヒと生涯にわたって記述されている。
- 17) 呉羽正昭(2009)「スキー場の立地とその変遷」神田孝治編『レジャーの空間－諸相とアプローチ』ナカニシヤ出版,p.39
- 18) 長野県統計協会編集・発行(2012)『平成24年版長野県民手帳』
- 19) 呉羽正昭(2009)『前掲書』,p.39
- 20) 鉄道省(1924)『スキーとスケート』鉄道省,pp.22-23
- 21) 長岡外史氏の次男である坂部護郎氏の遺稿集『はるかなるシュプール』では、日本のスキーの誕生について記述されている。1911(明治44)年2月、坂部氏はレルヒ氏よりスキー技術を伝授される。その後、ドイツ留学、1921(大正10)年帰国後、オーストリア総領事代理を務め、ハンネス・シュナイダー氏の来日に際して通訳などの世話をし、日本各地を一緒に巡

回する。1965(昭和 40) 年、坂部スキーコレクションを野沢温泉村に寄贈する。野沢温泉村にある日本スキー博物館のコレクションルームで展示されている。(日本スキー博物館発行(1997)『日本スキー博物館 20 周年記念誌』p.11)

坂部護郎(1976)『はるかなるシュプール/スキーと共に 60 年』スキージャーナル

²²⁾ 飯山市スキー史編纂委員会(1993)『飯山市スキー史』飯山市発行,p.6

²³⁾ 飯山市スキー史編纂委員会(1993)『前掲書』,p.16

²⁴⁾ スキー講習規定には「講習員を甲種、乙種に別つ 甲種講習員はスキー術に関する全般の技術を修習するものにして其講習期は約三週間とす 乙種講習員は小起伏地に於けるスキー運動法並に簡易なる特殊技術を修得するものにして其講習期は約十日間とす」と記載されている。

飯山市スキー史編纂委員会(1993)『前掲書』,pp.19-20

²⁵⁾ 諏訪市博物館編集・発行(2012)『前掲書』,p.3 では「明治 45 年 1 月に岡谷小学校の体操教員だった波間長重が高田でスキー講習を受けた。波間は帰郷後に岡谷小学校山校(現岡谷小学校)の裏山で笠原今朝一と笠原治三郎にスキー術を教え、塩尻峠や西山一帯を滑走したという。これが諏訪におけるスキーの発祥となった。」と記述されている。飯山市スキー史編纂委員会(1993)『前掲書』,p.20 では波摩長重である。

²⁶⁾ 野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『野沢温泉スキー誌』長野県下高井郡野沢温泉村,p.56, p.321

²⁷⁾ 野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,p.49

²⁸⁾ 野沢温泉スキークラブ編集(2012)『前掲書』,p.79

²⁹⁾ 野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,p.64

³⁰⁾ 野沢温泉スキー倶楽部会則は、「スキー普及身心ノ練磨及当温泉ノ発達ヲ図ル」ことを倶楽部の目的とした。1928(昭和 3) 年、倶楽部事業の中核となる研究部が設立され、「学術部(学術研究・機関誌発行)、競技部(スキー競技研究・選手派遣)、講習部(コーチ研究・講習会開催)に分かれた」。野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,p.67,p.126

なお日本スキー発祥の地高田では、「高田日報」がいち早く高田スキー倶楽部の結成を呼び掛け、1911(明治 44) 年高田スキー倶楽部の発会式を行った。我が国最初のスキー団体の誕生であった。長岡氏は全国的に呼び掛ける一大組織のスキー倶楽部設立を構想した。越信スキー倶楽部の発会式は、翌 1912 年に高田連兵場において、来賓に侍従武官及び陸軍大将乃木希典を初め、隣接各師団の見学将校、近県の県知事代理者、鉄道院関係者、新潟・長野両県の官民有力者等四百余名の参列を得て、高田支部の発会も兼ねて華々しく挙行された。これにより、前年に「高田日報」が結成した高田スキー倶楽部は廃止され、越信スキー倶楽部に吸収統合された。新スキー倶楽部は名称こそ「越信」であるが、実質は全日本的な観を呈するスキー倶楽部となったのである。越信スキー倶楽部は、発足半年で名称が「日本スキー倶楽部」に改称された。飯山市スキー史編纂委員会(1993)『前掲書』,pp.54-60 を筆者がまとめる。

³¹⁾ 記念誌編集委員会(1994)『スキー伝来 80 年 野澤のスキー スキークラブ創立 70 周年記念 / スキースクール開校 40 周年記念』野沢温泉スキークラブ・野沢温泉村発行,p.184

³²⁾ 野沢温泉スキークラブ編集(2012)『前掲書』,p.79

³³⁾ 1929(昭和 4) 年、札幌にジャンプ台(大倉シャンツェ)を設計するために、ノルウェーのオラフ・ヘルセット(Olaf Helset)一行が来日、野沢温泉スキークラブ片桐知従会長がヘルセット一行の招聘に成功。その教示により野沢シャンツェを改修し、固定大審判台を建設した。野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,p.76,p.92

³⁴⁾ 映画「スキーの驚異」は 1922(大正 11) 年日本初公開され、映画および著作『スキーの驚異』でアール・バルグスキー術を紹介した。野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,pp.108-125

³⁵⁾ 呉羽正昭(2009)『前掲書』,p.40

³⁶⁾ 野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,p.214

- ³⁷⁾信州の旅.comHP「画像で見る長野県スキーの変遷ー長野県スキー発祥 100 周年記念制作ー」を参照。<http://www.shinshu-tabi.com/ski100/rekisi-ph.html>
- ³⁸⁾片桐匡(かたぎりただし)氏は、野沢温泉スキークラブの会長を 1974(昭和 49)年から 1988(昭和 63)年まで、野沢温泉スキークラブ校長を 1982(昭和 57)年から 1984(昭和 59)年まで務めた。1972 年札幌冬季オリンピック出場の片桐美雪選手は娘であり、1976 年インスブルック、1980 年レークプラシッド冬季オリンピック出場の片桐幹雄選手は息子である。
野沢温泉スキークラブ編集(2012)『前掲書』,p.76
- ³⁹⁾野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『前掲書』,pp.213-217 を筆者がまとめる。【 】部分は筆者が作成した。
- ⁴⁰⁾『MARKETING horizon』VOL.2/NO.655 では、場力(ばぢから)を特集し、『『繋がりと連携の時代』(多様なプレイヤーが有機的に連携し、創発的に機能して価値を生み出す)と言われる現在、人や企業やモノやサービスが集まる「場」として、プラットフォームというコトバが毎日のように飛び込んでくる。プラットフォームの力が社会・経済・ビジネスの活性化に重要な意味を持って来ている」と指摘している。公益社団法人日本マーケティング協会(2013)『MARKETING horizon』VOL.2/NO.655,p.2
- ⁴¹⁾筆者が野沢温泉村役場にて野沢温泉村教育委員会岩上芳宗教育長より直接伺った内容と、下記資料により作成した。
野沢温泉村教育委員会(2012)「野沢温泉村保小中一貫教育構想 地域と共に創る新しい教育 野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育 野沢温泉学園「のざわ保育園 野沢温泉小学校 野沢温泉中学校」施設分離型一貫教育」平成 24 年 12 月
野沢温泉村教育委員会(2013)「地域と共に創る新しい教育 野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育 野沢温泉学園「のざわ保育園 野沢温泉小学校 野沢温泉中学校」施設分離型一貫教育」平成 25 年 4 月 <http://www.vill.nozawaonsen.nagano.jp/living/ikkankyouiku.pdf>
- ⁴²⁾野沢温泉村には幼稚園はない。
- ⁴³⁾清水聡子(2013)「人口減少に向き合う地域」『松本大学研究紀要』第 11 号, p.109
- ⁴⁴⁾小 1 プロBLEM:「入学したばかりの 1 年生で、集団行動がとれない、授業中座っていられない、話を聞かないなどの状態が数か月継続する」
文部科学省 HP 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議(第 1 回) 配布資料 平成 22 年 3 月 19 日【資料 3】「幼児期の教育と小学校教育の接続について」, p.21
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/gijigaiyou/_icsFiles/afieldfile/2010/06/11/1293215_3.pdf
中 1 ギャップ:「小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へ移行する段階で、不登校等の生徒指導上の諸問題につながっていく事態等」
文部科学省 HP 中央教育審議会 初等中等教育分科会 学校段階間の連携・接続等に関する作業部会 平成 24 年 7 月 13 日「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理 1/2」, p.7
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/09/10/1325226_1.pdf
- ⁴⁵⁾野沢温泉村教育委員会(2012)(2013)「前掲資料」
- ⁴⁶⁾村民満足度調査は、村内在住の 20 歳以上の人を無作為で抽出、調査用紙を配布し実施する。
野沢温泉村発行(2013)『広報のざわおんせん』(平成 25 年 4 月 24 日)第 460 号,p.11
- ⁴⁷⁾常盤文克・片平秀貴・古川一郎編(2010)『いま・ここ経営論』東洋経済新報社, p.7
- ⁴⁸⁾古川一郎編(2011)『前掲書』, p.6
- ⁴⁹⁾野沢温泉スキー場 HP 株式会社野沢温泉代表取締役社長 河野博明氏の言葉である。
<http://www.nozawaski.com/summer2011/general/index.php>
- ⁵⁰⁾片桐幹雄氏は、野沢温泉スキークラブ校長を 2002(平成 14)年から 2008(平成 20)年まで、

野沢温泉スキークラブ会長を 2008(平成 20) 年から現在まで務める。また財団法人全日本スキー連盟理事、アルペン部長でもある。1976 年インスブルック、1980 年レークプラシッドの冬季オリンピック出場選手であった。父は片桐匡氏である。

⁵¹⁾ 野沢温泉スキークラブ編集(2012)『前掲書』,p. 15

⁵²⁾ 筆者が河野博明氏より直接伺う。河野氏は野沢温泉スキークラブ会長を 1998(平成 10) 年から 2005(平成 17) 年まで務め、同 2005 年から野沢温泉スキー場を立て直すため、村民出資の株式会社野沢温泉の代表取締役社長を務める。

⁵³⁾ 2013 年 1 月 1 日現在、全国の村の数は 184 村、長野県の村の数は 35 村で全国 1 位である。第 2 位は沖縄県の 19 村、第 3 位は北海道と福島県の 15 村である。長野県の村の数は全国の村の約 2 割を占め、非常に多いことがわかる。

⁵⁴⁾ 2004 年 12 月 26 日、野沢温泉村が飯山市との合併賛否を問う住民投票を実施。投票資格者は 1986 年 4 月 1 日以前に生まれた村民と、村選挙管理委員会に登録申請した永住外国人。2004 年 12 月 20 日現在で 3,705 人合併に「賛成」か「反対」かの二者択一方式。投票率 50% で成立。結果は合併反対が 1,735 票(54.5%)、合併賛成が 1,446 票(45.5%)。長野県地方自治研究センター発行(2012)『長野県における「平成の合併」－合併・非合併の記録と検証－報告書』,pp.168-169

⁵⁵⁾ スキー場の資産、負債および借地権は村が保有し、経営部門は経営会社を組織し、村はスキー場の資産を経営会社に貸し付ける上下分離方式とする。

特定非営利活動法人ウインターレジャーリーグ(2012)『ウインターレジャー白書 2012』,pp.12-18

⁵⁶⁾ 長野県は「しあわせ信州創造プラン」(長野県総合 5 か年計画)を策定した。従来の延長線上だけでは新たな課題の解決ができない難しい時代。大地から与えられた恵みや際立つ地域の個性など長野県の優れた特徴を県民一人ひとりが磨き上げ、世界に通用する新たな価値を創造していくため「確かな暮らしが営まれる美しい信州」を基本目標に掲げた。また、基本目標をより分かりやすくするため、今生まれた子どもたちが大人になる概ね 20 年後を見据え、「未来の信州」の姿として示す。

長野県広報県民課(2013)『ながのけん』春号,平成 25 年 5 月 26 日発行,p.1

参考文献

- C. H. Lovelock & C.B. Weinberg (1989) *PUBLIC & NONPROFIT MARKETING*, 2nd, Scientific Press / 渡辺好章・梅沢昌太郎監訳(1991)『公共・非営利のマーケティング』白桃書房
- J. Trout & S. Rivkin (2000) *DIFFERENTIATE OR DIE, 2/E*, JohnWiley & Sons International Rights, Inc. / 吉田利子訳(2011)『独自性の発見』海と月社
- P. Kotler, J. R. Bowen, J. C. Makens (2003) *Marketing for Hospitality and Tourism*, 3rd, Pearson Education Inc. / 白井義男監修(2003)『コトラーのホスピタリティ&ツーリズム・マーケティング』ピアソン桐原
- P. Kotler & N. Lee (2007) *MARKETING IN THE PUBLIC SECTOR A Roadmap for Improved Performance*, Pearson Education Inc. / スカイライト コンサルティング訳(2007)『社会が変わるマーケティング 民間企業の知恵を公共サービスに活かす』英治出版
- 新井博(2011)『レルヒ 知られざる生涯～日本にスキーを伝えた将校～』道和書院
- 飯山市スキー史編纂委員会編集・飯山市発行(1993)『飯山市スキー史』
- 飯山市発行(2012)『長野県・飯山スキー100周年記念 飯山スキー100年誌』
- 河西邦人(2006)「公営スキー場の経営再生－ひつぷスキー場を事例に－」『札幌学院商経論集』第23巻 第1号, pp.125-170
- 片桐匡(1991)『わがシュプール』銀河書房
- 片桐匡(1994)『わがシュプールⅡ』銀河書房
- 北信州スノースポーツ活性化協議会企画・製作『スキーが変えた冬の暮らし未来へつなぐ「スキー100年」～スノーリゾートへのあゆみ～』平成23年度長野県「地域発元気づくり支援金」を活用して制作
- 楠木建(2010)『ストーリーとしての競争戦略』東洋経済新報社
- 呉羽正昭(2009)「スキー場の立地とその変遷」神田孝治編著『レジャーの空間－諸相とアプローチ』ナカニシヤ出版, pp.38-47
- 公益社団法人日本マーケティング協会(2011)『MARKETING horizon』VOL.4/NO.633
- 公益社団法人日本マーケティング協会(2013)『MARKETING horizon』VOL.2/NO.655
- 公益財団法人矢野恒太記念会(2012)『データでみる県勢 2013年版』第22版
- 小国喜弘(2009)「地域が元気になる保小中連携教育を」『学校運営』2009(平成21)年4月号
- 財団法人長野経済研究所(2009)『危機を生き抜く企業力 オンリーワン企業に学ぶ15の知恵』信濃毎日新聞社
- 坂部護郎(1976)『はるかなるシュプール/スキーと共に60年』スキージャーナル
- 佐藤学(2012)『学校を改革する－学びの共同体の構想と実践』岩波ブックレット
- 実業之日本社編集・著作(2010)『大人のスキー』2011 winter
- 清水聡子(2013)「人口減少に向き合う地域」『松本大学研究紀要』第11号, pp.101-115
- 白坂蕃(1986)『スキーと山地集落』明玄書房
- 菅平高原観光産業発足80年史編纂委員会(2007)『80年の雪点菅平高原観光産業発足80年史 1927-2007』菅平高原観光協会発行
- 諏訪市博物館編集・発行(2012)『諏訪市博物館特別展 霧ヶ峰スキーことはじめ－スキー場開拓にかけた諏訪人たちの熱き思い－』
- 全国勤労者スキー競技会(2013)『スキーメイト』No.149
- 総務省自治行政局『住民基本台帳人口要覧』各年版
- 鉄道省(1924)『スキーとスケート』鉄道省
- 電通 abic project 編(2009)『地域ブランドマネジメント』有斐閣
- 常盤文克・片平秀貴・古川一郎編(2010)『いま・ここ経営論』東洋経済新報社

- 特定非営利活動法人ウインターレジャーリーグ(2012)『ウインターレジャー白書 2012』
- 中浦皓至(2001)「日本スキーの発祥前史についての文献的研究」『北海道大学大学院教育学研究科紀要 84』,pp.85-106
- 『週刊東洋経済』「ゲレンデに客を呼び戻した白馬五竜スキー場の挑戦」2008 年 3 月 22 日号,pp.80-82
- 『週刊東洋経済』「スキー伝来 100 年目の苦悩 淘汰の嵐はこれからだ 全国のスキー場は半分に？」2010 年 5 月 15 日号,pp.78-79
- 東大社研・玄田有史・宇野重規(2009)『希望学 1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』東京大学出版会
- 長野県総務部地方課(1965)『長野県市町村合併誌』市町村編下巻
- 長野県広報県民課(2013)『ながのけん』春号,平成 25 年 5 月 26 日発行
- 長野県地方自治研究センター発行(2012)『長野県における「平成の合併」－合併・非合併の記録と検証－報告書』
- 長野県統計協会編集発行(2012)『平成 24 年版長野県民手帳』
- 『日経グローバル』「決断迫られる公営スキー場」2010 年 12 月 6 日号, No.161,pp.10-21
- 日本スキー博物館発行(1997)『日本スキー博物館 20 周年記念誌』
- 野沢温泉スキー誌編集委員会(1976)『野沢温泉スキー誌』長野県下高井郡野沢温泉村
- 記念誌編集委員会(1994)『スキー伝来 80 年 野澤のスキー スキークラブ創立 70 周年記念/ スキースクール開校 40 周年記念』野沢温泉スキークラブ・野沢温泉村発行
- 野沢温泉スキークラブ編集(2012)『スキー伝来 100 年 野澤のスキー スキークラブ創立 90 周年記念/ スキースクール開校 60 周年記念』野沢温泉いで湯とスキーの郷活性化協議会発行
- 野沢温泉村発行(2013)『広報のざわおんせん』(平成 25 年 4 月 24 日)第 460 号
- 野沢温泉村教育委員会(2012)「野沢温泉村保小中一貫教育構想 地域と共に創る新しい教育野沢温泉村 保小中一貫教育・高校連携教育 野沢温泉学園「のざわ保育園 野沢温泉小学校 野沢温泉中学校」 施設分離型一貫教育」平成 24 年 12 月
- 野沢温泉村教育委員会(2013)「地域と共に創る新しい教育 野沢温泉村保小中一貫教育・高校連携教育 野沢温泉学園「のざわ保育園 野沢温泉小学校 野沢温泉中学校」施設分離型一貫教育」平成 25 年 4 月
- 野沢温泉村史編纂委員会(1974)『野沢温泉村史』野沢温泉村発行
- 野沢温泉村総務課企画財政係編集(2012)『野沢温泉村の統計』野沢温泉村発行
- 博報堂地ブランドプロジェクト編(2006)『地ブランド』弘文堂
- 原研哉(2003)『デザインのデザイン』岩波書店
- 原研哉(2011)『日本のデザイン』岩波新書
- 古川一郎編(2011)『地域活性化のマーケティング』有斐閣
- ヘレナ・ノーバーク＝ホッジ(Helena Norberg-Hodge), 辻信一(2009)『いよいよローカルの時代』大月書店
- 山ノ内町・山ノ内町スキー発祥 100 周年記念事業実行委員会編集・発刊(2012)『山ノ内町スキー発祥 100 周年記念史 今 伝えたいこと』
- 渡辺保(2004)『現代スポーツ産業論』同友館
- 『信濃毎日新聞』(2012.12.30),(2013.3.28),(2013.4.10 夕刊),(2013.4.11)
- 『市民タイムス』(2011.12.22)
- 『日本経済新聞』(2009.11.27),(2011.12.13),(2012.12.12 地方経済面長野),
(2013.1.8 地方経済面長野),(2013.4.27),(2013.5.22 地方経済面長野)

長野県ホームページ
飯山市ホームページ
野沢温泉村ホームページ
野沢温泉スキー場ホームページ
山ノ内町ホームページ
信州の旅.com ホームページ
Mt.6 ホームページ